

2005年度第4回テクニカルフォーラム 議事録

- テーマ名：建築・住宅のユニバーサルデザイン：ハートビル法を超えて
- 講師：古瀬 敏氏（静岡文化芸術大学 教授）
- 日時：7月11日（月）17：30～20：00
- 場所：トリトンスクエアZ棟 4階フォーラム
- 参加者：14名+事務局（別紙参照）

資料 「建築・住宅のユニバーサルデザイン：ハートビル法を超えて」

講演 17：30～18：35

世界各国の流れに沿う形で1994年に導入されたハートビル法は、2002年の改正に当たって部分的にはあるが義務化され、また地方自治体が条例で要件を付加することを認めた。しかし、ユニバーサルデザインは規定のみによって達成されるものではない。利用者を排除しない、より使いやすい建築・住宅はどのようにしてつくっていくべきだろうか？ ハートビル法の設立の背景を踏まえて、ユニバーサルデザインのあるべき姿について解説があった。

自由討議 18：45～20：00

コーディネータを事務局の小島隆矢氏にお願いし、自由討議が進められた。

自由討議が始まる前に、先生よりデザインで間違っている例として、洗面所の蛇口、キッチンキャビネット、引き戸の錠前、浴室ユニット、トイレの逆に取り付けられた手すり、玄関回りの段差、公衆電話の位置等、具体的事例の写真を示しながら補足説明が行われた。

- Q. パワーポイントのまとめの文で、「人のためではなく、自分のため」と書かれているがユニバーサルデザインとは誰でもどこでも自由に使える形のものと言うことで、行われているが、自分のためとはどういうことか。
- A. その次に「自分ならOKでも他人にも問題がないかどうか」と書いている。住宅のユニバーサルデザインというのは誰にでも支障がないということはどこでおさえるかという、不要な段差を作らない、這って洗面・トイレまでいける、が出発点だと思う。しかしそれだけで良いわけではなく、能力がこのレベルだという時にそれに対応するものを+ α で組み込むことが必要である。それが組み込めるような器がユニバーサルデザインである。これは最低要件である。その最低要件で、誰それが住み、その人はこういう+ α の要求をするというなら、それを具体的に可能にする懐の大きい要件を

満たした器でなければならない。それが住宅であるべきだと思う。住宅の耐用年数は50年、100年と言わざるを得ない。30代、40代の人がなくなり、子供の世代となり、また次の世代となる。其の時まで基本の枠組みがOKな住宅がどうかというと、誰が来ても良い、自分が100まで生きてとしても出て行けと言われない住宅にしたい。共通なプラットフォームと、自分がこうなったからという、ある瞬間は両方を満たさなければいけない。ある瞬間というのは凄く難しい。最初からすべて組み込むのは無理である。万が一のときはそれが組み込めるようになって欲しい。

- Q. 段差なしは金融公庫の関係から標準化されてきている。扉のロックとか細かいところではまだまだ一般の住宅では出来ていない。現在の住宅の中で、優先順位を付けるとすればどこからやれば良いのか。
- A. 私の家は97年に建て、もう丸8年経過する。公庫の基準が変わるときであり、設計指針の素案を作ったのが92年で、プレ協、2*4、木造住宅協会にも打診し、いずれこうなると思うと言った。みなさん、長期的には考えなくてはいけないと理解していた。それ故、公庫が変わるときにはそれほど大騒ぎしないで済んだ。設計指針を作るとき、これは半歩先だから良いとか、これは2歩先だから無理だとか議論して作った。我が家では玄関ドアはワンアクションのプッシュドアではないが、今はそれが標準だ。このように、現在は細かなところも大分良くなっている。蓄積がない設計者に設計されると辛いところに手が届かなく、駄目である。
- Q. 障害がなくフラットであることがユニバーサルデザインと把握しているが、障害者のリハビリのための段差があっても良いのではないか。
- A. 住宅は最後のより所である。そこに無理やり使わなければ生活できないようなハードルを設けるべきではない。理由は単純で、一歩家を出れば7人の敵があるように、外出すれば色々なバリアがあり、トレーニングする場はいくらでもある。家の中に無理やりハードルを作ることはない。2階建ての住宅を考えた場合、2階に上がるには階段かエレベータになる。住宅用のエレベータは遅いので健常者は階段を上るだろう。自分の体力で階段を上ろうとするのは選択肢の問題で、選択できなくて無理やりバリアを設ける仕組みはいけない。
- Q. 将来、高齢者も身障者もロボットの発達により、ユニバーサルデザインが無くても良くなるのでは。車椅子が容易に階段を登れるとか、段差があっても平気だとか、そういう意味でユニバーサルデザインは将来なくなるのではないか。ユニバーサルデザインはどのような方向性を向いていくのか。
- A. 全てに機械に頼るのが良いことかということ、それは良くない。様々な利用者を意識したデザインでなければならないのが出発点である。次が、改変・付加、置き換えたり、後から加えるもの、改変とは設備機器を取り替えたりすることだが、付加が一番単純なものが、例えばこのブックコンピュータがデスクトップのコンピュータと何が違うか。キーボードのテンキーを省いている。テンキーを省くことによりこのサイズを保

っている。数字データを入れるときに困る。必要であればテンキーパッドをUSBで繋げば良い。このコンピュータを例えばA4サイズに収めたいから省いたんだけど、必要であれば機能を付け加えればよい。携帯電話も道路交通法が変わり、運転中は携帯電話を使ってはいけないことになった。ただし、ハンズフリー機能は別ということで、途端に何百円で売られるようになった。それまでその機能はあったが何千円もして、障害を持った人はお金を払って使っていた。そのときは特殊解だったが、道交法の改正で一般解になった。携帯電話そのものではなく付加することによりシステムとしてのユニバーサルデザインとなっている。付加しても100%満足するわけではない。電動車椅子を使わなければいけない人はそれ以外の手段ではなかなかカバーできなくて、それを使うことにより他の人と同じ行動能力を再び取得して社会で仕事ができる。ポリオの後遺症で肺機能が落ちた人は酸素ボンベを携帯している。それを持つことにより他の人と一緒に仕事ができる。これが自立支援技術（アシスティブ・テクノロジー）である。みんなに適用できるのでないからユニバーサルではない。これが高度な意味でのバリアフリーである。これで他の人と遜色なく働き、社会で暮らしていくことができる。ロボットは自立支援技術の方である。これがあるから段差があっても良いというのは間違いである。デザインの基本思想が間違っていると云わざるを得ない。

- Q. イタリアはデザインの国であるのか、風呂のバスタブとか、水道の蛇口のレバーが隠されていて不便を感じたことがある。この機能を隠すというのはどういう発想から来ているのか。
- A. 多分その国では当たり前前のデザインでみんなが知っている。自国の人は標準になっているので意識していない。標準が違う国から来るとその働き方がわからない。全ての人を意識したユニバーサルデザインは年齢、性別、能力を問わないが、それ以外に民族、文化を付け加えることも可能である。デザインも文化的違いは歴然とあり、戸惑うことがある。米国の研究者が話したことだが、父親が痴呆になってきた。彼は回すと水が出る蛇口しか知らない。自動水洗は知らない。手を出せば水が出るんだけどその前に回さなければならないというのが自分の奥の意識に残っている。手をかざすというシールがあっても分からない。これも文化の違いに属する。この辺が難しいところである。
- Q. ユニバーサルデザインを満足させるにはお金がいる。階段の勾配を緩くすれば広さがある。健常高齢者と身障者とは区別する必要がある。親子三代で助け合う気遣いが必要となる。しつけ等の教育とかのソフトの面があって良いのではないか。
- A. これは研究の前の理念の問題である。2年半前に横浜でユニバーサルデザインの国際会議を行ったとき、米国の方がいみじくも言った。成田からMM21に来るのに車椅子の人は随分苦労しないと来られない。途中、人の手助けで来られたが、次回来るときは人の手助けなしで来られるようになって欲しい。人の手助けが必要ということはそこに人がいないとできない。手助け無しで全て出来れば自分自身で移動ができる。

個人の自尊心、尊厳の問題である。手助けが必要な仕掛けを無意識に、あるいは意図的に作ればそれを当てにしなければならなくなり、そのような仕組みは間違いである。夏の衣替えのとき収納する場所がある。昔提案されたトロンハウスでは全自動で、ボタンを押せば自動的に夏物と冬物が入れ替わる。こんなものはいらない。誰かが来たときに片づけてもらえば良い。ギブアンドテークでも、ヘルパーでも良い。しかし、ある瞬間これが絶対必要というものを拜むようお願いするのは間違っている。これだけ高齢者が増え、障害を持った人が社会に参加するとなると、これらの人を意識しないとユニバーサルデザインとは言えない。

- Q. 性能表示でのバリアフリーが叫ばれて大分時間がたっているが、業界では次のものということでユニバーサルデザインが基準として出てくるのではないかとされている。ハートビル法も一部義務化されてきた、という噂があるが、そのような動きがあるのか。
- A. 分からない。交通バリアフリー法とハートビル法が一体化したほうが良いのではという議論があると聞いている。一緒にしても単なる数字のつじつま合わせであって、本質とは違う。現実には古いストックが多く、新しいものがこの水準で作られればストックの積み重ねが徐々に良くなるけど、古いものがなかなか更新されないという難題がある。耐震改修でも、10年前の阪神大震災から耐震改修を促進させるため、地震税を設定してはと提案した。岡田恒男先生が言われるには、「それはぎらつきすぎる。日本は1年で百何十万戸住宅を新築している。現時点で住宅は千四百万戸が耐震既存不適格でストックがある、これから10年たてば相当の割合で自然に置き換わるであろう。それに期待した方が良くと思う」、と言われた。今年2005年1月に神戸で建築学会の震災から10年経って、何が変わったかの検証会合が行われた。そのときの話で「既存不適格はまだ千百万戸残っている。ずいぶん建てたが、依然古いのが残っている。古いのは結局安いからという理由で、民間の賃貸市場では多くの人がまだ住んでいる。予想どおりに行かなかった」と岡田先生が予想どおりに行かなかったことを認められた。やはり悪いのはばつさりと切る必要がある。それをする良い方法は税金である。「都市計画税とは都市迷惑税である。地震が来て壊れる建物は都市に対する迷惑そのものである。そこに税金を高くかけても良いのでは」、というのが私の主張である。何かあったら困る。とても国が持ちきれない。ユニバーサルデザインの立場でも同じことが言えるだろう。
- Q. 高齢者を考えた場合、まず第1に車椅子の利用を考えることになっているが、実際に車椅子を利用している高齢者は数%しかいない。高齢者が今後増えたとしても、全体の母体の数からすれば少ないと思う。規準となっている車椅子を使うよりもっと他に気をつけなければいけないことがあるのではないか。
- A. 車椅子がひとつの物差しになっているというのは、段差があれば車椅子では移動できないというのが最大のポイントである。視覚障害の人は移動するのに分かりにくいと

いうことはあるが、一番の問題は安全性である。点状ブロックは注意喚起である。線状ブロックは本来は誘導であるが、案内まで示そうとして、必要のないところまで置かれている。最近情報は電子的に提供できる仕組みが検証されつつある。愛知の万博会場では全ての仕組みを統合して試行しているようだ。そうすれば相当良くなるかもしれない。聴覚は障害があっても音でのコミュニケーションが必須でなくて、今までなんとなくすり抜けてきた。聴覚障害者だけのコミュニティが成立し得る。聴覚障害が困るのは、突如状況が変わったときに警報や災害の警報等のメッセージの感知が遅れるからだ。急に変わった状況の伝達が基本的に音声で行われるということだが、通常の場合、聴覚障害者は日常生活に困っていない。高齢者はありとあらゆる機能が少しずつ落ちている。それぞれの部分では障害者手帳をもらえない。障害者はあるところが大きく落ちていて障害者手帳がもらえて、他の機能でカバーできている。高齢者は他の機能も役に立たない。アナウンスは分からない、目も良く見えない、歩行の能力も衰えている、ぼろぼろである。しかしそれを意識して、物理環境や社会的システムを提供してはいなかった。どうするかというと、障害を持っている人が排除されている問題を一つずつ解決するしかない。これが現実かなと思う。20年前に、いずれ人口がピークのときに人口の25%以上が65歳以上となる、そうした長寿社会への対応をどうするかという問題が突然浮かび上がった。答えは街中で、途中で休憩する場所を置くことと、トイレを沢山置くことの二つであった。ほとんどは障害対応で良かったのだが、ベンチとトイレは障害者だけを意識していれば出てこなかった。それ以外は障害者対応とほぼ同等で、ただ数の問題だけである。高齢者の場合は社会に出て金を使ってもらわなければ、わが社会は経済的に成り立たなくなる。高齢者が外に出て、年を取ったことの衰えが全然意識されないような社会インフラを作らなくてはいけない。

- Q. あるモデルハウスの場所での議論の中で、バリアフリーと正反対の話があり、家の中には段差を作らなければならない、人間はある程度家の中で緊張感を持って行動することが必要である。台所とキッチンのところ段差を事実設けていた。この考え方でモデルハウスを作っているところがある。車椅子の生活も人生80年の中で何年か生活する。5、10年として、5/80か10/80の範囲の中で2階建てであればエレベータを作ればコストアップになる。これを全ての住宅で作っていくのか。考え方によっては地域にユニバーサルデザイン、完全バリアフリーの住宅を公共的にいくつか作って、入らなければならない段階になれば入る。当然入るときにお金がかかる。そのとき今までの住宅は人に貸す。家賃との差額を負担する。こういう考え方があるが、そのような発想はどうか。
- A. 転居が当たり前と考える人にとっては、家を変えること自体問題がないが、そこに根を生やしてきた人にとっては転居は大きなハードルである。どうしてもというのであれば、同じコミュニティの中で転居を選択肢に入れるのは大きな障害にはならない。それ

以上離れたところに転居するのはリロケーション、いわゆる転居ショックというのが高齢になるほど問題になる。健康でなければ住めない住宅というのを押し付けるのは、デザイナーの独りよがりである。転んで骨を折ったときにアメリカであれば間違いなく裁判沙汰になるし、日本も将来はそうなる。設計者が自分で賠償責任保険をかけてやるのであれば良い。